

倭文神タケハツチ——荒ぶる神を退治する織物

古川のり子

「倭文神・建葉槌命（しとりかみ・たけはつちのみこと）」は、日本書紀本文に記された中つ平定の神話の中でも、「二に云はく」として書き添えられたごく小さな異伝のなかだけに現れて活躍する神である。葦原の中つ国を皇孫の支配する国とするために、高天原のタカミムスビによって地上に派遣されたフツヌシとタケミカツチが、ついに中つ国の代表者オホナムチ（オホクニヌシ）に国譲りを承諾させ、他の自然神たちをも誅伐して天に復命したときのことを、紀第九段本文は次のように語っている。

故、大己貴神、則ち其の子の辞を以て、二の神に白して曰はく、「我が怙めし子だにも、既に避去り

まつりぬ。故、吾亦避るべし。如し吾防禦かましければ、国内の諸神、必ず当に同く禦きてむ。今我避り奉らば、誰か復敢へて順はぬ者有らむ」とまうしたまふ。乃ち国平けし時に杖けりし広矛を以て、二の神に授りて曰はく、「吾此の矛を以て、卒に功治せること有り。天孫、若し此の矛を以て国を治らば、必ず平安くましましなむ。今我当に百足らず八十隈に、隠去れなむ」とのたまふ。（隈、此をば矩磨泥と云ふ。）言訖りて遂に隠りましぬ。是に、二の神諸の順はぬ鬼神等を誅ひて、（一に云はく、二の神遂に邪神及び草木石の類を誅ひて、皆已に平けぬ。其の不服はぬ者は、唯星の神杵杵背男のみ。故、加倭文神建葉槌命を遣せば服ひぬ。故、二の神天に登

るといふ。倭文神、此をば斯國製俄未と云ふ。〜果に復命す。

オホナムチの国譲りのあと、「一に云はく」の異伝によれば、フツヌシとタケミカツチは、順はぬ邪しき神々や草・木・石などの類を征伐したが、ただ星の神カガセロだけが最後まで服従しなかった。そこでさらに倭文神タケハツチが派遣されると、遂に従ったという。

倭文神タケハツチは、記紀神話においては紀のこの小異伝にしか登場しないが、他に「天羽槌雄（アメノハツチヲ）神」の名で古語拾遺のなかに見ることができ。そこには、アマテラスの石戸隠れによって世界が暗闇になった時、アメノハツチヲが文布を織ったことが、このように記されている。

天羽槌雄神（倭文が遠祖なり）をして、文布を織らしむ。天棚機姫神をして神衣を織らしむ。所謂和衣なり。

他に、延喜式、三代実録に「葛城倭文坐天羽雷（アメノハツチ）神」、「葛城倭文天羽雷命」の名が見える。倭の文（アヤ）と書く「倭文」（シツ、シツオリ、シ

ツリ、シトリ）は、絹のような繊細な織物とは正反對の、穀や麻の植物性繊維で模様を織り出した、日本古来の丈夫な織物のことだとされる。（注1）またタケハツチは、タケ（猛々しい）・ハ（体を覆うもの＝衣服）・ツ（助詞）チ（精霊）で、「倭文神タケハツチ」は、「倭文織物を司る猛々しい衣服の神」ということになる。

しかし倭文がいくら丈夫にできているとしても、紀「一に云はく」の異伝に語られていたように、強力な戦神フツヌシとタケミカツチがもて余した荒ぶる星の神を、最後に現れた織物の神が退治してしまうのは奇妙なことのように思われる。実際、紀第九段一書一二では、フツヌシとタケミカツチが星神を討伐したことになる。この方が理解しやすい。そこで小異伝におけるタケハツチの活躍については、「この神を遣わして星神を服従させ得た理由不明」（注2）とされ、とくに考察すべき問題とはみなされてこなかった。（注3）本論では、古代における倭文の意味の検討を通じて、天つ神の支配に最後まで抵抗した荒ぶる神を、なぜ織物の神が服従させ得たのか、その理由について考えてみたいと思う。

人名や地名を除く「織物」としての倭文は、万葉集に9例、日本書紀に2例（神代の当該箇所は除く）、出雲国造神賀詞に1例を見ることが出来る。これらの例にお

いて倭文は、神への供え物（倭文幣 シツヌサ）、に用いられるほか、主に帯（倭文機帯 シツハタオビ）や腕輪（倭文手纏 シツタマキ）、敷物（倭文纏の胡床 シツマキノアゴラ）、鞍（倭文鞍 シツクラ）に用いられ、やはり相当に丈夫な織物であることが分る。そのなかで倭文機帯は、すべて恋愛の歌のなかに次のように詠み込まれる。

A 大君の 御帯の倭文機 結び垂れ 誰やし人も 相
思はなくに
(紀・武烈即位前紀)

B 古の 倭文機帯を 結び垂れ 誰といふ人も 君に
はまさじ
(万・卷一一二二六二八)

C 古に ありけむ人の 倭文機の 帯解き替へて 廬
屋立て 妻問ひしけむ 勝鹿の 真間の 手児名が
奥つきを こことは聞けど 真木の葉や 茂りたる
らむ 松が根や 遠く久しき 言のみも 名のみも
我は 忘らゆましじ
(万・卷三三四三二)

A、Bの歌については一般に、「大君の御帯の倭文機（古の倭文機帯を）結び垂れ」までが、次の「誰」を導

くための序であると説明される。しかしCの歌からは、男女が互いに「倭文機」の帯を解き合うことが、男女の契りを結ぶうえで重要な意味をもっていた様子がうかがわれる。したがってA、Bの恋愛の歌のなかでわざわざ「倭文機」の帯を結ぶことが歌われているのも、この帯に男女のあいだを結びつけるような大事な意味を認めているからであろうと推測される。また神への供え物としての「倭文幣」は、次のように用いられる。

D 玉だすき かけぬ時なく 我が思へる 君によりて
は 倭文幣を 手に取り持ちて 竹玉を しじに貫
き垂れ 天地の 神をそ我が祈む いたもすべなみ
(万・卷三三三二八六)

E 死にし妻を悲傷ぶる歌一首
天地の 神はなかれや 愛しき 我が妻離る 光る
神 鳴りはた娘子 携はり 共にあらむと 思ひし
に 心違ひぬ 言はむすべ せむすべ知らに 木綿
だすき 肩に取り掛け 倭文幣を 手に取り持ちて
な放けそと 我は祈れど まきて寝し 妹が手本は
雲にたなびく
(万・卷一九一四三三六)

F

放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌一首
 大君の 遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる
 天離る 鄙にしあれば 山高み ……(中略)…
 あしひきの をてもこのもに 鳥網張り 守部をす
 ゑて ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭文に取り
 添へ 乞ひ祈みて 我が待つ時に 娘子らが 夢に
 告ぐらく 汝が恋ふる その秀つ鷹は 松田江の
 浜行き暮らし つなし捕る 氷見の江過ぎて 多古
 の鳥 飛びたもとほり 葦鴨の すだく旧江に 一
 昨日も 昨日もありつ 近くあらば いま二日だみ
 遠くあらば 七日のをちは 過ぎぬやも 来なむ我が
 が背子 ねもころに な恋ひそよとそ いまに告げ
 つる (万・巻一七―四〇―一)

Dはやはり恋愛の歌で、倭文幣を捧げることによって恋しい相手と結ばれることが祈願されている。またEは妻の死を悲しむ歌だが、作者が供え物の倭文を手を持って祈っているのは、「妻と引き離さないでくれ」、すなわち離れていく妻の魂を繋ぎとめることである。

次のFは、大切な鷹狩り用の鷹を逃がしてしまった際の歌で、ここでは倭文幣を用いて「離れていく鷹を捕まえること」が祈願されている。古代においては魂が鳥の

姿で表現される場合があるので、同じ倭文を幣として、離れていく妻の魂を繋ぎとめようとするEの歌と、離れていく鳥を捕まえようとするFの歌とのあいだには、共通する発想を認めることができる。AとFの歌全体を通して倭文は、男女の魂・運命を結びつけること、離れていく魂(鳥)を繋ぎとめることと深く関わっていると思われる。
 出雲国造神賀詞のなかには、次のような倭文の用例が見られる。

…天の下を知ろしめさむ事の志のため、白鶴の生御調の玩物と、倭文の大御心もたしに、彼方の古川岸、此方の古川岸に生い立つ若水沼の、いや若えに御若えまし…

天皇の心の形容に倭文を用いたこの語句は、「日本固有の織物のように天皇の御心もしっかりと」(注4)と解釈されるが、ここでも倭文は天皇の魂が身体にしっかりと繋ぎとめられた状態にあることを表していると考えられる。

ところで万葉集には、「倭文手纏(シツタマキ)」「倭文織の腕輪」という言葉がある。

G 倭文たまき 数にもあらぬ 命もて なにかここだ

く 我が恋ひ渡る (万・巻四一六七二)

H 倭文たまき 数にもあらぬ 身にはあれど 千年に

もがと 思ほゆるかも (万・巻五一九〇三)

I 菟原処女の鼻を見る歌一首

葦屋の 菟原処女の 八歳子の 方生ひの時ゆ ……

(中略) ……千沼壮士 菟原壮士の 伏せ屋焼き

すすし鏡ひ 相よばひ しける時には 焼大刀の

手かみ押しねり 白真弓 鞆取り負ひて 水に入り

火にも入らむと 立ち向かひ 鏡ひし時に 我妹子

が 母に語らく 倭文たまき 賤しき我が故 ます

らをの 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや

ししくしろ 黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置

きて うち嘆き 妹が去ぬれば… (万・巻九一八〇九)

倭文手纏は「数にもあらぬ・いやし」にかかる枕詞だとされる。倭文に「賤(シツ)」の意をもたせる用法は平安時代には多く見られるが、それ以前はこの倭文手纏の場合のみであり、この腕輪が玉石や貴金屬製のものに

比べて粗末であるところから「数にもあらぬ・いやし」にかかる枕詞として用いられるようになったと説明されている。(注5)しかしそれにもかかわらず倭文手纏は、G・Hの歌では数にもあらぬ「命・身」へと続き、Iの歌もまた、自分を慕う二人の男性の争いを嘆いて死んだ

「倭文たまき 賤しき我」(II菟原処女)の悲劇的な運命を、その主題としている。したがって倭文と「命」、「魂」、「運命」などの結びつきは、やはりここにも認めうるのではないかと思われる。

これまで見てきたような倭文についての考え方は、平安時代の「倭文芋環(シツノヲタマキ)」という言葉の用い方に継承されている。倭文芋環とは、倭文を織るための麻糸を巻きつけたもので、たとえば伊勢物語のなかの歌に、次のように詠み込まれている。

むかし、物いひける女に、年ごろありて

いにしへの しづのおだまき 繰りかへし 昔を

今に なすよしも哉

(伊勢物語・三十二段)

「古代の倭文芋環のようにくると、仲の良かった

昔を繰り返し今に再現するすべがあつたらしいのに一と解釈されるこの歌で、倭文芋環から繰り出される麻糸が「規則正しく繰り返し紡ぎ出される運命の糸」という意味で用いられているのは明らかだと思われる。

ところが一方で同じ倭文芋環は、物語のなかで怪物を退治する道具としても用いられているのである。たとえれば平家物語・巻八の緒環の段には、豊後の国の緒方三郎維義は大蛇の子だとする伝説がある。ある娘のもとに正体の分からない男が夜毎に通ひ、娘は妊娠をした。不審に思った母親に教えられ、朝帰っていく男の狩衣の襟に針を刺して「倭文の緒環」をつけ、その糸をたどって山の麓の岩屋までいくと、そこには大蛇がいて、喉に針を刺されてうめいていた。この大蛇は高知尾明神の神体で、その妻となった娘が生んだ子供の五代の子孫が緒方三郎維義だという話である。

娘、母のをしへにしたがって、朝帰する男の水色の狩衣の頸かみに針をさし、しづの緒環といふものをつけて、へてゆくかたをつないでゆけば、豊後国にとつても日向さかひ、優婆岳といふ高の裾、大きな岩屋のうちへぞつなぎいれたる。をんな岩屋のくちにたたずんで聞けば、おほきなる声してによび

けり。「わらはこそ是まで尋ね参りたれ。見参せむ」といひければ、「我は是人のすがたにはあらず。汝姿を見ては肝たましひも身にそふまじきなり。とうとう帰れ。汝がはらめる子は男子なるべし。弓矢打物とつて九州二島にならぶ者もあるまじきぞ」とそいひける。女重ねて申しけるは、「たとひいかなるすがたにてもあれ、此日來のよしみ何とてか忘るべき。互いにすがたをも見もし見えむ」といはれて、「さらば」とて、岩屋の奥より臥だけは五六尺、跡枕べは十四五丈もあるらむとおほゆる大蛇にて、動揺してこそはひいでたれ。狩衣のくびかみにさすと思ひつる針は、すなはち大蛇のうぶえにこそさいたりけれ。

ここで倭文芋環は、喉を刺す針とともに、高知尾明神の神体でもある大蛇の正体を暴き、結果的に退治してしまふ力をもつものと見なされている。この伝説とまったく同じタイプの話は、今日も「蛇婿入り」芋環型の昔話として各地に広く伝承されているが、ここでは蛇婿は「糸（麻糸）を通した針」をつけられたために正体を知られ、多くの場合、蛇婿もその子供も死んでしまうことになる。

また一方でこのタイプの話は、古く古事記の崇神天皇の段にも見られ、三輪山伝説として有名である。

此の意富多々泥古と謂ふ人を、神の子と知りし所以は、上に云へる活玉依毘売、その容姿端正し。是に、壮士有り。その姿形、威儀、時に比なし。夜半の時に、たちまちに到来りぬ。故、相感でて、共に婚ひ供に住める間に、未だ幾ばくの時も経ぬに、其の美人、妊身みき。爾くして、父母、其の妊身める事を怪しびて、其の女を問ひて曰ひしく、「汝は、自ら妊めり。夫無きに何の由にか妊身める」といひき。答へて曰ひしく、「麗美しき壮士有り。其の姓名を知らず。夕毎に到来りて、供に住める間に、自然ら懐妊めり」といひき。是を以て、其の父母、其の人を知らむと欲ひて、其の女に誨へて曰ひしく、「赤き土を以て、床の前に散し、へその紡麻を以て針に貫き、其の衣の襷に刺せ」といひき。

故、教の如くして、日時に見れば、針に著けたる麻は、戸の鉤穴より控き通りに出で、唯に遺れる麻は、三勾のみなり。爾くして、即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸に従ひて尋ね行けば、美和山に至りて、神の社に留まりき。故、其の神の子と知りき。

故、其の麻の三勾遺りしに因りて、其地を名づけて美和と謂ふぞ。

イクタマヨリビメは、「へその紡麻(ウミヲ)」を針に通して謎の夫の衣の裾につけ、その正体を暴いている。「卷子(ハソ)」「(和名抄)」は、紡いだ麻糸を幾重にも巻きつけたもの——苧環のことで、平安末の歌字書・奥義抄には、「をうみてまきたるへそといふ物をしつのをたまきといふ」とある。つまり三輪山の神をからめつつた「へその紡麻」は、やはり倭文を織るための麻糸と見なしてよいと思われるのである。

以上のように文献に表された「倭文」について見てみると、次のようなことが言えるだろう。まず倭文苧環から繰り出される麻糸には、「規則正しく繰り返し紡ぎ出される運命の糸・命の糸」としての性質を認めることができる。そしてそのような麻糸によって模様を織り成される倭文織物は、「定められた運命の織物」としての意味を持つていると考えられる。だからこそ苧環や倭文織物は、一方で男女の運命・魂を結びつける絆、あるいは離れて行く魂をつなぎとめる絆として機能しうるのである。同時に他方で、荒ぶる超自然的存在をそのあるべき運命のなかからめとる縄・網としても機能しうるのだ

と思われる。

このように考えたうえで、再び紀第九段本文「一に云はく」の異伝を見直してみると、なぜ倭文神タケハツチが、荒ぶる星の神を退治したとされていたのかが理解できるようになる。つまり倭文神タケハツチは、倭文芋環が大蛇を捕縛する繩として働いたのと同じように、怪物的存在をからめとる網としての役割を果しているので、この神話は、天から運命の織物が投げかけられることによつて、荒ぶる自然神の混沌とした力がその網の目にとらえられて秩序化され、あるべき運命のなかにからめとられていった次第を物語っているのだと思われる。古語拾遺の神話において、世界が常闇の状態になったときに、倭文遠祖アメノハツチヲが文布を織つたと記されていたのも、最高神アマテラスの石戸隠れによつて綻んだ世界秩序を織り直すための一つの手段として理解することができる。倭文神タケハツチの神話のごく小さなものにならざるに、後世の伝説や昔話にもつながる、筋の通つた物語を残してくれているのではないだろうか。

注

- (1) 飯田武郷『日本書紀通釈』第二卷、叢書房、一九四〇年、754〜756頁。
- (2) 小島憲之他 新編日本古典文学大系『日本書紀』一、小学館、一九九四年、119頁。
- (3) 倭文神タケハツチについての研究としては、肥後和男「タケハツチの神について」『国語』411、一九三九年、東京文理大学、1〜14頁がある。
- (4) 武田祐吉他 日本古典文学大系『古事記 祝詞』岩波書店、一九五八年、457頁。
- (5) たとえば、片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』、角川書店、一九八三年、200〜201頁。